

柀咲く

柏崎

睦 岩手

近隣の庭にとつぜんあらはれし秋の客人まらうどかもしかいつとう
一日に何かひとつをやればいい老人われの消極の生
この冬をとにもくらくらさむ蘭の鉢居間にうつせり霜月十日
柀はしづかに咲けり人はなぜたたかふのかと問へどこたへず
柀の花咲くよるを初雪はひそひそふりて過ぎてゆきしか

花水木の実

児玉かつ 宮城

莫大な借金かかへるこの国の小二とぢぢが縄とびをする
人のももの取つてはならぬ当り前園児が知りてプーチン知らず
紅葉の後のあやふき力いま失せていちまい肩に散りたり
人の世がコロナ禍だらうがなからうが秋には赤い花水木の実
快適なくらしといへど程がある「音姫」が消す排泄の音

白鳥泳ぐ

遠藤 豊子 埼玉

白鳥の飛来のニュース視たるのちしばらく胸に白鳥泳ぐ
強風を待ちてゐしがに保存樹の銀杏が園にぎんなん降らす
キツチンの小黒板に夕食のメニューを知らす、ちぎきたのしみ
皴の手を見つつ気づきぬうつくしい渦の指紋が消えてしまへり
木枯に林の黄葉ながれくるからからきらからからきらきら

叔母

中津川 靱 坐 埼玉

子をふたり叔母は育てき安寿逝き厨子王いまだ尋ね来たらず
欲しいもの江戸川乱歩の文庫本ホームの叔母は探偵志望
家のことわたしに託し掌てを合はす叔母のかなしみ身に染み入れり
叔母のため通つた今年余禄ありて佳きふるさとをたつぷり詠めた
友をりて人情ありてじよんのびな津南で飲む酒まことにうんめ

朝のあきかぜ

岩 崎 佑 太 東京

歩けない祖母が歩ける夢を見て夢よりさめて朝のあきかぜ
排泄の介助ををへしわれにありりんごの芯のごときさみしさ
風かよふ木陰にをればわが影はいづこに憩ふ秋の真昼を
霧の夜のキャベツ一枚また一枚はがした先にあるクライシス
紅葉の森ゆきながらわれは恋ふ陽にすぎとほるめだかのからだ

寒暖差疲れ

四野宮 和 之 東京

何着るか思ふだけでもへ寒暖差疲れへなんです十月なかば
あさがほがそここ咲けるお宅あり町内清掃してゐる初冬
立て続けにティッシュ使ひぬ春は杉、秋はこれからピークの豚草
二十二首読みかへしつっつビール飲む三年ぶりの歌会の帰り
つっしみて教へかうむる世となりぬ自動車教習所のAIに

秋のせんちめんたる

手塚 寿々枝 長野

仏より神になりたい死んでから などと言ひしよとほきかのひと
ひと思ふ旅想ふまた生をおもふ銀のすすき野ひかりあまねし
いくつもの命いただき永らへて湯気もうもうとくさびらを煮る
午後の陽と草の実を着け猫帰るそれさへ秋のせんちめんたる
霜月の夜は長くなり亡き夫のネルシャツ直しわがバジヤマとす

どちらがお好き

鷺 巢 錦 司 静岡

隣りとの境を越えし柿の実を三つ持ちゆき和平をたもつ
瑠璃色のつぶら実さはにしなやかに伸べて揺れをりムラサキシキブ
芋と栗どちらがお好き 十五夜と十三夜に見る月の味はひ
唇がもがいてゐるよ マスクして歌ふ学校合唱コンクール
神無月のうちにメジロはやつて来て今年の冬は寒いよと鳴く

ツィオペ

栗山 由利 福岡

ワンオペの子育てとほくツィオペでシニアほちほち猫育てする
わたしにはこれがいちばんいい暮らしカキフライ5個、靴は3足
レジ横の百円羊羹ひとつだけ今日のわたしを許してやらう
葉をちらすほどには強くない風と桜紅葉があたりあふ午後
来年の年賀はがきに兎の絵 元気だつたら父九十六

癒えゆくか

都 甲 真紗子 福岡

戦争もコロナ禍も無き世のごとし海峡穏し秋潮は濃く
病院の屋上より見る六連島むつれじま 家族思はず大小の島
未明より病室につとむる人のありお茶配り塵集め清掃の人ら
荒れ狂ふ嵐が脳を囲むかに耳鳴りは耳を攻め上りくる
野末ゆく列車の音が遠ざかる癒えゆくか今日の空は秋晴れ

妖怪

田 中 久 子 長崎

がまんする美意識に欠けコーヒを飲みたくなればコンビニに寄る
スワンボート漕ぎ出す子ゐてスワンボート見送る子ゐて十和田湖紅し
山登りよりだんだんと山歩き木苺つんで桑の実つんで
ヘアピンのカーブを使ひ耳の穴こしよこしよとする雨の日の暮れ
年老いて妖怪、怪物好きになりわれもゆつくり妖怪になる

独りあそび

梶 原 道 幸 熊本

小春日のおだしき家のうら山にあそぶ小猫の平和な世界
馬鹿げたる独りあそびに股間より色づく山を見てみたりする
豆腐、もやし、若布しまひに青ネギを入れて一人の味噌汁くわんせい
指宿の病院にゐる老妻が日に一度する電話かなしも
薬学部構内に見し無花果は赤子のほほのいろに熟れたる